インドネシア人像と プロパガンダの手法との関係

—— 北原武夫『インドネシア人の性格』を中心に

Dewi ANGGRAENI (デウィ・アングラエニ : Lecturer, Universitas Indonesia)

✉ d.anggraeni@ui.ac.id

(インドネシア) インドネシア大学人文科学部日本学科講師/広島大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。日本近代文学、ポストコロニアル理論。「(劣等人種)間における動的な力関係—寒川光太郎『黒い瞳』における「ポルネオ表象」—」(『国文学』第238号, 2018)、「Jun Takami's "Shominzoku" and Ambiguous Criticism of the Greater East-Asia Co-prosperity Sphere」(*International Review of Humanities Studies* Vol. 3 No. 2 (Special Issue), 2018)、「佐多稲子『髪の歎き』論—欧亜混血女性と日本人の人種観—」(*Outlook Japan*, Vol. 7 No. 1, 2019) など。

Japanese Propaganda Methods in Indonesia during the Military Occupation

: Focusing on Kitahara Takeo's *Indoneshiajin no Seikaku*

Japanese South-commissioned writers who left for Southeast Asia during World War 2 as members of the military's Propaganda Unit usually presented Indonesian people in a positive light. However, this was not the case with Kitahara Takeo, one such writer. This article examines the function of the negative portrayal of Indonesians by Kitahara, as seen in his essay *Indoneshiajin no Seikaku*(1943.8), and argues that this form of representation was a propaganda technique employed by the author for the purpose of furthering the project of a "Greater East Asia Co-Prosperity Sphere". In advancing this cause, Kitahara emphasized that "tough measures rather than mere slogans" were needed. In his view, the move toward a co-prosperity sphere had to be embodied in concrete policy, and it was necessary to recognize the actual problems in the Indonesian colony in order to devise the appropriate policies. His negative representation of Indonesian people can be read as a way of expressing "the real problem in the colony" that had to be addressed if the right policy was to be arrived at. He believed that this, eventually, would lead back to the idea of establishing a "Greater East Asia Co-Prosperity Sphere". The purpose of this paper is not to categorize Kitahara's work according to a simple "anti-war/pro-war" distinction, but rather to observe the diversity of propaganda techniques employed by South-commissioned writers.

Keywords Contact-Zone(接触領域), Greater East Asia Co-Prosperity Sphere(大東亜共栄圏), Indonesia(インドネシア), Kitahara Takeo(北原武夫), South-Commissioned Writers(南方徴用作家)

1 はじめに

インドネシアに派遣された南方徴用作家から見れば、長年ヨーロッパに植民地化されてきた「インドネシア」とは、人種に基づいて社会階層が分かれている場所、いわゆる、「接触領域」¹であったといえる。「人種意識は植民地社会の原動力」²であるため、人種に基づく階級社会において、「白人は支配者、非白人は従属者」という制度が維持されることは言うまでもない。

また、蘭印政府は地元領主を先住民指導者とすることで間接統治を行っていた³。20世紀初頭の「倫理政策」によって、一番低い階層に位置付けられた先住民にも教育の機会が与えられた。実際は、庶民階級の先住民と、知識人階級の先住民を比べると、後者は非常に少なかった。しかし、西洋教育を受けたにもかかわらず、先住民の知識人は社会的に白人と同様の扱いを受けることがなかった。こういった不平等な社会階層は、先住民に支配階級に対する不満を抱かせ、独立を目指す「民族主義運動」を生んだ。また、日本が上陸した際、インドネシア人は、日本がオランダの植民地体制を倒壊させてインドネシアを独立国にすると信じて、日本軍に希望を抱いた。これがインドネシアにおける南方徴用作家が目撃した、「接触領域」としての植民地の実情であっただろう。

このような実情がある上で、「大東亜共栄圏」の宣伝任務を求められた南方徴用作家は、インドネシアの実情をどのように表現するのだろうか。本稿は、戦争中インドネシアのジャワ島に宣伝班員として派遣された北原武夫の「インドネシア人の性格」(初出未詳であるが、『雨期来る』文體社, 1943.8に収録)における否定的なインドネシア人像を手がかりに、南方徴用作家によるインドネシア表象とプロパガンダの手法との関わりを検討する試みである。

徴用作家の主な仕事は、戦争遂行または「文化工作」に関して検閲される範囲で執筆し、現地の日本語新聞及び日本の新聞や雑誌で報告することである。換言すれば、作家たちは占領地向け及び日本の内地向けの「大東亜共栄圏」のプロパガンダ活動をしていた。対象となる読者は異なるが、南方諸民族を描写するための表現は同様であり、いわゆる、「同祖同族」・「同じアジア人」・「ヨーロッパ植民地の犠牲者」などといったものである。

しかし、北原武夫によるインドネシア人像は典型的な表現から離れている。インドネシア人を描くために、北原はむしろ、「泥水の中で、インドネシア人が洗濯したり水浴したりしてゐる」⁴、「醉生夢死的な性格の地主であるらしい」⁵などといった「インド

¹ Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, 2nd ed. (Routledge, 2008), p.7.

² Adrian Vickers, *A History of Modern Indonesia*, (Cambridge University Press, 2005), p.28. なお、本稿における日本語訳は執筆者によるものである。

³ Adrian Vickers, 上掲書, p.14.

⁴ 北原武夫「ジャカルタ入城日誌」(『雨期来る』文體社, 1943), p.71.

⁵ 北原武夫「インドネシア人の性格」(『雨期来る』文體社, 1943), p.137.

ネシア人の原始性」にしか焦点を当てない。こうした「大東亜共栄圏」構想に対する北原の態度に関して河西晃祐は、「北原は「大東亜共栄圏」構想からも距離を保っていたが、その一方でインドネシアと日本の位置づけに関しては、植民地—宗主国に類する形態ととるべきだと考えていたといえる」⁶と論じている。北原は、「大東亜共栄圏」構想から距離を保っていた」とはいえ、必ずしも構想自体を批判していたというわけではない。本稿では、宣伝任務における、北原が描いた否定的なインドネシア人表象の機能を問い直す。結論を述べると本稿は、否定的なインドネシア人像はむしろ、「大東亜共栄圏」建設のための、北原の宣伝手法であるという読みを提供するものである。

後述するが、「大東亜共栄圏」構想に対して、北原は、スローガンより具体的な問題対策を重んじるようである。北原の考えでは、「大東亜共栄圏」を実現するために、思想を政策に具現化せねばならず、相応しい政策を取るためには、植民地における実際問題を認識せざるを得ない、ということである。これに関して、典型的な描写から離れた否定的なインドネシア人像は、適切な植民地政策を取るための取り組まなければならない「植民地における実際問題」を表す方法として読み取れる。これは結局、「大東亜共栄圏」建設をめざすことに集約されると言える。

本稿では、日本軍上陸直前後の下におけるインドネシア人の状況と結び付けながら、「大東亜共栄圏」構想に対する北原の姿勢を明らかにする上で、エッセイ「インドネシア人の性格」におけるインドネシア人像の読みを考察する。本稿の目的は、北原の作品を「反戦・主戦」という単純な区別に従って読解するものではない。「徴用令状」を受け取り、宣伝班として植民地に行っていたということ自体は、戦争協力と見なされただろう。本稿はむしろ、南方徴用作家における宣伝手法の多様性を考察する試みである。宣伝任務を求められていたため、植民地を描くことに限界があったのは言うまでもないが、一人の徴用作家としては個性的であったことは確かであろう。したがって、徴用作家が描く「インドネシア観」の全容を明らかにするために、北原の描くインドネシア人像の特色を明らかにすることは重要である。

2 「言葉より実践」——「大東亜共栄圏」構想に対する姿勢

北原武夫(1907-1973)は、1943年3月頭から同年11月中旬まで、約9カ月インドネシアのジャワ島に陸軍報道班員として派遣されて滞在していた。宣伝班員の仕事は、アメリカ製映画の検閲、インドネシア語新聞『アジア・ラヤ』における「日本語読本」の執筆、また、陣中新聞『赤道報』(のちに、『うなばら』と改題される)の編集といった「文化工作」に関わるものが主であった⁷。

⁶ 河西晃祐「徴用作家北原武夫・浅野晃・武田麟太郎の「インドネシア」戦時期「南方」観の一考察」(『紀尾井史学』第21号, 2002), p.27.

それと同時に、徴用中に視察したインドネシアの状況をエッセイとして執筆し、日本の新聞や雑誌に発表する。

宣伝業務に関して、北原は「兵隊でもなければ作家でもなく、単にものを書くといふ職業人の筆先の徴用」⁸と述べ、「大東亜共栄圏」構想自体への賛否を問う姿勢を明確に見せてはいなかった。ただし北原が、植民地に生じる社会問題に対して具体的な対策などを取らなければ「大東亜共栄圏」はスローガンに過ぎないと考えていたことは注意すべき点である。このような態度は、エッセイ「戦いの厳肅さについて」(初出：『三田文学』1944.4-5)に反映されている。北原は、戦争勃発後に生まれた「思想戦」について、以下のように述べている。

八紘為宇という大精神は、言うまでもなく一つの思想である。だがこの思想は、文字の上で表現を練り、論理を構築し、思索に思索を重ねて行けば遂に頂に達するという底の思想であろうか。多くの学者はそう解釈し、努めて表現を練り、論理を構築し、専ら思想としての態を整えようとした。が、何が出来上がったか。押しつけがましく記紀の文句を援用した見掛けだけは立派だが、説得力も迫真力もなく、況して戦闘力などは微塵もない空中楼阁が出来上がった(略)。思想としての最も肝腎なところは、飽くまでも実行の世界にあり、実際にそれを行い得たか得なかったかで一切の勝負の決ってしまうものだ。現に戦っているこの日本が更に戦力を充実し、実際に米英を撃滅して、大東亜共栄圏の確立を実地に具現しない限り、この思想の思想としての結論は何処からも出て来はしない⁹。

引用文を見れば、北原は「大東亜共栄圏」構想自体を批判しているとは言い難いと言えよう。北原が述べようとしていたことは、「大東亜共栄圏」を建設するためには「思想」だけでは足りないのであり、要するに、連合軍に勝利しなければ、「大東亜共栄圏」を実現できないものだ、ということであろう。まさに、南方侵略の本当の目的は、資源獲得と南方諸民族の協力を得て連合軍に勝利することによって、「大東亜共栄圏」を建設することである。第16軍の宣伝班長であった町田啓二は、「宣伝班結成当初の軍の方針は私の知る限りでは、植民地を開放してジャワを独立させようとしていたのである」¹⁰が、「しかし日が経つにつれて、この『一つになれ』の意味が怪しくなり、『日本の戦争遂行に全面協力せよ』というムードに変貌した」¹¹と述べている。このような宣伝方向の変化は、1942年3月20日に実施された軍布告第4号によるインドネシアの国旗・国歌の使用禁止、さらに29日に実行された「アジアの指導者・日本」、「アジアの光・日本」、「アジアの

7 木村一信「北原武夫の「ジャワ徴用」体験—薔薇を描くこと—」(『論究日本文学』第68巻、1998)、p.49。

8 北原武夫・中島健蔵「座談会 文化の本質—南方文化工作について」(『南方徴用作家叢書 ジャワ編 12 北原武夫』龍溪書舎、1996)、p.145。

9 北原武夫「戦い厳肅さについて」(『南方徴用作家叢書 ジャワ編 12 北原武夫』龍溪書舎、1996)、pp.134-135。

10 町田啓二『ある軍人の紙碑一剣とペン—』(芙蓉書房、1978)、p.180。

11 町田啓二、上掲書、p.183。

母・日本」という「三亜運動」という政策に具現化した。「三亜運動」自体は、インドネシア人に批判され¹²、支持を得なかったため、期待された効果を出さずに6ヵ月で終わった。なお、北原は1942年11月まで派遣されていたため、「三亜運動」が終わったときには、まだインドネシアに滞在していたと推測される。インドネシア人の独立の希望を無視することが「三亜運動」の失敗の原因の一つとなったことも、北原は分かっていただろう。

したがって、「言葉より実践」という態度を持つ北原が、「大東亜共栄圏」建設に「文化工作」の意義を問うことは不思議ではない。エッセイ「現代精神の行方」(初出:『文学界』1943.5)において、北原が記した宣伝の仕事に関わるエピソードは、中国人とインドネシア人の融和協力の問題に関するものであった。北原は、「とにかく原住民と華僑とが仲好く手を握つてゐる和氣霽々たるポスターを作らうではないかといふことにな」ったが、一度目は「抽象的過ぎて何のことだか分から」ず、二度目は「具體的過ぎて、つまり漫畫風になつてしまつ」たため、「たうたうそのポスターの案はうやむやになり、いつの間にか自然に立ち消えてになつてしまつた」¹³と語っており、その経験を「滑稽なこと」だと述べている。「文化工作」に関して、北原は「根源は純然たる政治上の問題であつてジャワの經濟行政を如何にするか、華僑對策を如何にするか、等々の根本的な行政方針を確立し且つそれが着實に實施されない以上、百萬のポスターを街の角々に貼り付けてみたところで何の役に立たぬ」¹⁴と述べている。

戦争中にマレーに派遣された中島健蔵との座談会(「文化の本質——南方文化工作について」『文学界』1943.4-5併号)において、北原は、欧亜混血人と中国人に対するインドネシア人の態度について「大體インドネシア人の表現といふものはどんな事柄に對しても隱密ではつきりしない、陰に籠つてもやもやツとしてゐる」と指摘している。また、このような問題を掴むには、「單なる官僚的の政治家では駄目で、やつぱりものを觀察するリアリストの才能や、嗅ぎつける勘や洞察力を持つてゐる政治家でなければピンと來ないでせう」¹⁵と述べている。

北原にとって、業務としての「文化工作」は「純然たる政治の仕事であり」、「畫家や小説家なんぞがおいそれと手の出せるもんでな」¹⁶かったという。北原が述べようとし

¹² 「三亜運動」では、住民は天皇に敬意することを義務付けさせられたために、毎朝、東京、つまり「皇居の方向」に向かって身体を90度曲げて最敬礼させられた。これは、特にイスラム教徒の中では非常に批判されていた。イスラム教では、アッラー(神様)以外の崇拝を表すことは罪と見なされるのである。東部ジャワを中心とするイスラーム系組織のナフダトゥル・ウラマー(NU)の指導者であったハシム・アシュアリ(Hasyim Asy'ari)は、すべてのNUのプサントレン(寄宿制のイスラム学校)に「最敬礼をする禁止」と、命令した。これによって、ハシム・アシュアリは反日の扇動者として見なされて1942年4月投獄されたが、イスラム教である日本軍のAbdul Hamid Ono (Ono Nobuji)の仲介により同年8月に解放された(Yasuko Kobayashi, "Islam During the Japanese Occupation", *The Encyclopedia of Indonesia in the Pacific War* [Peter Post, et.al, ed], Leiden & Boston: Brill, 2010, p.305)。

¹³ 北原武夫「現代精神の行方」(『南方徴用作家叢書 ジャワ編 12 北原武夫』龍溪書舎、1996)、pp.87-88。

¹⁴ 北原武夫、前掲書、p.88。

¹⁵ 北原武夫・中島健蔵、前掲書、p.162。

ていたことは、植民地における問題は文学者の仕事ではなく政治家の仕事だ、ということである。また、北原が主張しようとしていたことは、インドネシアにおける問題は植民地のリアリティーであり、それを「文化工作」より相応しい政策によって解決しなければ、「八紘一宇」思想の実現は不可能だ、ということである。

ただ、「植民地における問題は政治家の仕事だ」という態度を見せるにもかかわらず、従軍経験を取材したエッセイ群から確認できるように、北原はその「純然たる政治上の問題」にも目を向けた。北原は、自身が述べた「ものを観察するリアリストの才能」・「嗅ぎつける勘」・「洞察力」を利用して、中国人とインドネシア人の融和協力の問題あるいは「隠密ではつきりしない、陰に籠つてもやもやツとしてゐる」インドネシア人の表現といった植民地の実際状況を取り上げた。実際に、戦中から戦後にかけても、北原は、徴用体験と直接的に関わる小説を二つ発表した¹⁷。それらは「政治的時間を経験しながらも政治的空間を生きようとはしない」¹⁸ことに帰結したものであり、換言すれば、植民地のリアリティーの描写を避ける物語である。これは、まさに「文学と政治は個別のものである」という北原の態度を示している。したがって、植民地に対する「加害者」側の代表者としての北原の姿勢を明確にするためには、小説より従軍エッセイを考察することに意味があるだろう。

「大東亜共栄圏」構想の下にインドネシア人を「同祖同族」などと肯定するという典型的な表象とは異なり、日本で発表された従軍エッセイにおいて北原はインドネシア人の醜いところ、すなわち、「本当」のインドネシア人像を描き出している。北原が日本人の読者に指摘しようとしていたことは、「本当」のインドネシア人像を描写することによって「大東亜共栄圏」の実現を妨げる問題が見えてくる、ということである。

3 アモック——残酷な「インドネシア人像」

「大東亜共栄圏」構想の下に、かつて差別的に表象された南方諸民族は、「日本人と同じ祖先を有する「民族」として、(話者の本心とは別のところで)「肯定的」に表象されるようになって」¹⁹いった。これは、「大東亜共栄圏」を建設するための日本の南方侵略を正当化する方法とも言えよう。しかし、この「肯定的な表象」は実は表面的なものに過ぎな

¹⁶ 北原武夫、上掲書、p.88.

¹⁷ 戦中に発表された小説は「カリオランの薔薇」である。本作品は、初めて陣中新聞『うなばら』、1942年9月20日に掲載され、若干の字句の修正が施されてから従軍記『雨期来る』(文體社1943.8)に収録された。戦後になって発表された小説は、「嘔気」(『新生』1946.1)と加筆と改稿された「カリオランの薔薇」(『群像』1951.1)であった(尹小娟「徴用文学における〈南方〉表象の変容：北原武夫の場合」(『九大日文』第27号、2016)、p.30)。

¹⁸ 土屋忍「南洋文学の一九四〇年代—北原武夫を中心に—」(『南洋文学の生成：訪れることと想うこと』新典社、2013)、p.311.

¹⁹ 河西晃祐「日本の南方起源「言説」と南進論」(『上智史学』第46号、2001)、p.148.

い。多数の南方徴用作家は、積極的にインドネシア人を「同祖同族」として描写している反面、差別表現も用いている。いうまでもなく、南方諸民族は日本人より〈劣等種〉と見なされていたためである。1941年2月から5月まで蘭印(オランダ植民地時代の「インドネシア」の旧名)を旅行した高見順は、帰国してから発表された紀行文『蘭印の印象』(改造社、1941.9)において、汚い川でマンデー(水浴び)をする先住民について、「マンデーの実際を見て、その汚い河といふ⁽⁷⁷⁾の汚さが、いやはや實に物凄、想像以上の汚さであるのに驚いた」²⁰と書いている。また、陸軍報道班員としてジャワ島に派遣された浅野晃は、従軍記『ジャワ戡定餘話』(白水社、1944.1)において、日本軍に「スダラ、スダラ」(兄弟)と言いながら近づいており、それから「カシ・ワン」(お金をくれ)と言っているインドネシア人の子供たちについて記している。これに対して、浅野は「スダラもいいが、情ないスダラといふ氣持である」・「あんまりスダラ面をしてくれるな、と言ひたい氣もする」²¹と記している。

先住民を「野蛮人」・「未開人」として描写するという差別的なまなざしは、まさに典型的な支配者のものである。西欧植民地主義では、先住民を文明化する使命を正当化するために、このまなざしが利用されたのである。日本も、台湾・中国・朝鮮半島を支配するのに際し、このまなざしを用いていた²²。しかし、台湾・中国・朝鮮半島とは異なり、西洋の旧植民地としての南方は「「欧米文明」が体现した場所」²³であった。南方侵略の本当の目的は、先住民を文明化することではなく、連合軍との戦争に勝利し、「大東亜共栄圏」を建設することであった。そのために、先住民の協力を獲得しなければならなかった。したがって、南方において差別的なまなざしが利用されているものの、「未開人」などといった先住民像は、西欧植民地主義が先住民に進歩をもたらさなかったことを強調するための方法である。高見順は、「汚い川での水浴び」という先住民の習慣を、欧州人の家に住んでいる先住民の給仕が水道で水浴びをするようになったことと対比し、「土民の習慣などを、和蘭人は「尊重」してそのままにしておく方針を取つてゐる」²⁴というオランダの植民地政策を批判していたのである。一方、浅野晃は、インドネシア人の子供に対して、かつて「あんまりスダラ面をしてくれるな」と思っているが、「考へ

20 高見順「蘭印の印象」(『高見順集』河出書房、1943)、p.343.

21 浅野晃「ジャワ戡定餘話」(『南方徴用作家叢書 ジャワ編 1 浅野晃』龍溪書舎、1996)、p.109.

22 例を挙げれば、日本による「台湾表象」についてFaye Yuan Kleemanは「台湾は非常に危険な場所であり、先住民が徹底的な野蛮人であるものとして描写される」と述べている。(Faye Yuan Kleeman, *Under an Imperial Sun: Japanese Colonial Literature of Taiwan and The South*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2003, p.20)。また、近代日本における朝鮮人像について、山口公一は「近代日本の「他者表象」としての朝鮮社会並びに朝鮮人イメージは「非文明」「野蛮」「未開」といったものであった(略)。こうした「文明」と「野蛮」の自他認識は、1920年代の日本の植民地官僚・官使にとっては、身につけるべき当然の認識であったともいえる」と指摘している(山口公一「「文明」と「野蛮」の自他認識—近代日本の他者表象—」『アジア学科年報』(9)、2015)、p.80)。

23 河西晃祐「徴用作家北原武夫・浅野晃・武田麟太郎の「インドネシア」戦時期「南方」観の一考察」(『紀尾井史学』第21号、2002)、p.20.

24 高見順、前掲書、p.317.

て見ると、これはこつちが悪いのである。何百年の西歐の支配と壓迫とから解放された彼等は、ただただ嬉しかつたのだ」²⁵と、すぐ反省したのである。

しかし、北原の描くインドネシア人像は、多くの南方徴用作家とは異なる。北原は、完全に差別的なまなざしでインドネシア人を描き出したのである。これは、特に徴用から帰国後に日本で発表されたエッセイ「インドネシア人の性格」においてもっとも明らかになった。本エッセイにおいて、北原は「僕等日本人の眼に分かつたやうな分からないやうな一種不可思議」(p.137)で、「いろいろの意味で原始的で程度が低い」(p.148)インドネシア人の庶民層を描写しているためである。詳述すると、北原が指摘した「分かつたやうな」こととは、インドネシア人は蘭印時代に教育機会を与えられなかったため、「大體に於いて教育がなく、中には簡単な読み書きすらもできない」こと、氣候風土の関係上、インドネシア人が「酔生夢死的な性格の地主であるらしい」(p.137)ということである。一方、「分からないやうな」こととは、インドネシア人が「日中とか夕方とかといふだけでなく、午前三時や四時頃の夜更けでも」(p.138)よく喋ること、「自分が知らないと言ふことができないくらいだから、人に向つて尋ねる勇氣もなく、尋ねられた方もまた、尋ねられて知らないと答える勇氣がない」(p.143)者であるということである。

以上の指摘は、「文明人」から見た〈劣等〉と思われる異文化との接触経験の表象であると言えよう。少なくとも、北原が述べた「どうしても納得できない」(p.138)インドネシア人の性格は、他の徴用作家による作品にも確認できる。例えば、海軍報道班員としてインドネシアに派遣された寒川光太郎は『従軍風土記』(與亜日本社、1943.8)において、インドネシア人との「無駄な会話」の場面を記している。その人は給料が安いと言っているものの、二人の妻と四人の子供を持っている。納得できない寒川が、「どうやつて生活してゐるんだい」・「どうして喰つてゐるんだい」と聞くと、その人は繰り返して「わしの月給ですあ」・「あしの、給料でさあ」と答えている。寒川は「インドネシアとの會話では、ときどきこんな果てしのない堂々をめぐりに會ふことがある」²⁶と思っている。

しかし、「一種不可思議」な性格について、北原が最も注意を注ぐのは、インドネシア人が「實に隱密な、陰慘と言つてもいいほどの慘忍さを持つてゐる」(p.143)ということである。北原が述べた「隱密な慘忍さ」の性格は、従軍経験取材した他のエッセイにおいても記されている。「ジャワの自然」(「爪哇の自然について」として『新潮』、1943.2に発表)において、北原は、インドネシア人が「僕等の眼にはただ植物が育つやうにして育つたやうな茫然たる性格のやうに見え、そのくせその反面に隱密な、壓さへつけられた、一種名状し難い殘忍さを持つてゐる」²⁷と述べている。こういった「隱密な慘忍さ」は複数回述べられており、その表現を如何に解釈できるかは見逃してならないものであ

²⁵ 浅野晃, 前掲書, p.109.

²⁶ 寒川光太郎『従軍風土記』(與亜日本社, 1943), p.170.

²⁷ 北原武夫「ジャワの自然」(『雨期來る』文體社, 1943), pp.108-109.

ろう。

「隠密な惨忍さ」の性格について、北原は「古いジャワの神話によつて男性のみが躍る戦ひの踊り」(p.144)に見られたと指摘している。

戦闘に至るまでの間の舞踊は、形象化された踊の形式で以てリズムカルに演ぜられるが、一たび戦闘の場面に移ると、それまでの形象化された様式とはまるで一変した、純粹に寫實的な、殆んど劇的な手法を以て演ぜられることだ。舞踊の形式が完全に二つに分かれ、戦闘の場面になると突然生になるだけではない。その戦闘の場面が實に異様なほど徹底的に惨酷であつて、一方の踊り手が片方の踊り手の胴中に劍を何度も何度も突き刺し、刺された踊り手はその度に倒れ、倒れてはまた躍りやり、それをまた何度も突き刺すと遂にぐつたりと打ち伏してしまふが、すると最後に一方の踊り手がその上に跨つて止めの一刀をぐつと突き刺し、刺された踊り手はしばらく手足を苦しさに震はせたのち完全に息が絶えた眞似をして踊が終るのである(p.145)。

踊りの戦闘の場面をインドネシア人の「隠密な惨忍さ」の例としたことは、根拠のないものとして判断できるが、注目すべき点は、北原が取り上げた「異様なほど徹底的に惨酷さ」(p.147)は、「アモック」(Amuk)現象であると推測できることである。アモックとは、特にマレーシア・インドネシアで起こる特異な精神障害であり、文化依存症候群として分類されているものである。ヨーロッパ人が南アジア及び東南アジアにおけるアモック現象を目にしたという記録は、16世紀まで遡られる。19世紀に入ると、アモックは一般的に先住民男性による暴力行為であり、東南アジアの本質として考えられていた。第2代シンガポール総督であったJohn Crawford(1823-1826)はアモックをインドネシアのジャワ人における特徴であると述べ、それを「猛烈で必死に誰にでも走ること」・「戦闘で猛烈な発症または突撃とする」²⁸のものであると定義している。また、アモックは、シンガポールの英語新聞において「彼らの礼儀正しく穏やかに見える表面の下には激しい情熱がくすぶっており、これは破壊的な火炎に変わるため、火花しか必要としない」²⁹、「狂気は決して珍しいものではなく、アジア人種によるアモックは本来の精神疾患の有り様にすぎないためである」³⁰ものとして説明されている。本新聞において説明された「礼儀正しく穏やかに見える表面の下には激しい情熱がくすぶっており、これは破壊的な火炎に変わる」というアモック現象は、まさに「茫然たる性格のやうに見え、そのくせその反面に隠密な、壓さへつけられた、一種名状し難い残忍さ」という北原の指摘に類似しているだろう。

²⁸ Henry Yule and Arthur Coke Burnell, *Hobson-Jobson: A Glossary of Anglo-Indian Colloquial Words and Phrases, and of Kindred Terms: Etymological, Historical, Geographical, and Discursive*, William Crooke, ed. London: John Murray, 1903, p.19.

²⁹ "Jottings From a Tropical Island", *The Straits Times*, 30 May, 1874, p.2.

³⁰ "Insanity Among Asiatics", *Eastern Daily Mail and Straits Morning Advertisers*, 23 Oct, 1905, p.2.

また、南方徴用作家のうち、武田麟太郎もアモック現象について触れている。武田麟太郎は従軍記『ジャワ更紗』(筑摩書房、1944.12)において、アモックを「いづれも處と時を選ばず、突然的に狂人めいた興奮状態に陥つて、念願の復讐を實行する。日頃の彼らとは見えないほど兇暴になり残忍性を發揮し、猛りに猛つて、他を殺傷する」³¹と描いており、「表面穏かなインドネシア人の中を流れる血の激しさを見るべき」として指摘している。換言すれば、北原が述べた「インドネシア人の陰的な惨酷さ」、武田麟太郎が指摘した「インドネシア人の中を流れる血の激しさ」というアモック現象は、インドネシア人の注意すべき点であると言える。二人の徴用作家は、アモック現象に注意すべき理由を述べていない。しかし、彼等が指摘しようとしていたことは、適当な対抗策を取らなければ、この「陰的な惨酷さ」は何時か反日行為を引き起こす、ということであるのではないだろうか。

北原はまた、インドネシア人について「想像以上に個人主義的であつて團結心がなく」、「男女共に以上に嫉妬深く」、「思やりとか親切とかいふものに比較的缺けてゐる」(pp.147-148)と述べている。この表現は裏付けのないものに見えるが、北原がこのように考える根拠は、日本上陸直前後におけるインドネシア人の状況と結びつけられる。長年のオランダ植民時代に、インドネシア人は一番低い階級に置かれており、人種に基づくオランダの植民地政策に不平等な階級社会を感じていた。したがって、インドネシア人は、民族出身を問わず、インドネシア人のみのための「独立したインドネシア」を願っていた。それに関連して、インドネシア人は常に欧亜混血人及び中国人を疑いの目で見ており、いずれもインドネシアの独立を希望していないだろうと考えていた。日本が上陸した直後、短期間に権力の真空があり、混乱が起こった。その期間に、オランダ植民地時代に多くの恩恵を受けた多数の欧亜混血人と中国人は、インドネシア人による略奪の対象となった。民族主義者たちですら、略奪事件は何世紀にもわたる先住民の搾取の結果だろうと確信していた³²。前述したが、欧亜混血人と中国人に対する「隠密ではつきりしない、陰に籠つてもやもやツとしてゐる」インドネシア人の態度については、北原は中島健蔵との座談会でも触れている。

北原が指摘した「想像以上に個人主義的であつて團結心がない」・「男女共に異常に嫉妬深い」ことは、おそらく欧亜混血人と中国人に対する、インドネシア人の嫌悪感を示しているだろう。「個人主義的」とは、インドネシア人はインドネシア人のみを優先し、他人種を受け入れようとしないことを示している。それはまさに「八紘一宇」実現の目標から離れているものと言える。

北原は、インドネシア人を肯定的に表象するよりも、目撃したアモック現象に注意を注ぎ、インドネシア人を否定的に描き出している。このような描写を通じて、北原が

³¹ 武田麟太郎「ジャワ更紗」(『南方徴用作家叢書 ジャワ編 12 北原武夫』竜溪書舎、1996)、p.89.

³² Elly Touwen-Bouwma, "The Indonesian Nationalists and the Japanese "Liberation" of Indonesia : Visions and Reactions" (*Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. 27, No. 1, 1996), p.10.

示唆しようとしていたことは、この問題の対抗策を取らなければ、「大東亜共栄圏」が実現され難くなる、ということなのではないだろうか。特に、北原自身は、南方侵略の目的とインドネシア人が抱く日本人への独立の期待の食い違いという「隠されている真実」を意識しているのだろう。

4 独立の希望に応えない——「書けなかった実情」

帰国後に発表されたエッセイ「ジャカルタ入城日誌」(『文学界』1943.2)において、北原は、1942年3月10日にジャカルタに辿り着いた日本軍が「インドネシアの子供や、それから先刻の農夫などが僕等に向つてするお辞儀や敬意の表し方」³³で歓迎されたことを記している。こうした歓迎の仕方は北原に「日本人が何のためにここまで戦ひに來たか、またその戦ひが彼等にとつてもどういふ意味を持つてゐるか、第一日本人といふのはどういふ人種か、さういふことには彼等は一切無智に違ひないが、そのくせ、さういふ民族に特有の本能的な自然さから、日本人と見るとびよこんとお辞儀をする」という疑問を抱かせ、「どういふわけか何か厭な不愉快な氣」³⁴持ちにさせた。この場面について、神谷忠孝は「この文章の裏には日本軍の行為を聖戦だと思っていないことがかくされている。大東亜共栄圏を疑うリベラルな精神がなければこうは書けなかったであろう」³⁵と解釈している。

それはそうであるのかもしれないが、その反面、北原はインドネシア人が日本軍を歓迎した理由も分かっているのではないかと考えられる。上陸した日本軍に対するインドネシア人の歓迎について、宣伝班長の町田啓二は「インドネシアに一つの伝説があつて、「オランダ人は、北方から来る黄色人種によって追い払われる」ということになっていて」³⁶と述べている。町田啓二が述べた「伝説」は、実際はJangka Jayabaya(ジャヤバヤ予言)というものを示しており、特にジャワ人の庶民層の中で一般に信じられていたものである。予言では、「北東部から来た羽が黄色い雄鶏は青い眼の白い水牛を駆り立てる」と言われていた。ジャワ人は「羽が黄色い雄鶏は日本人、青い眼の白い水牛はオランダ人」³⁷であると信じていた。また、予言において、「羽が黄色い雄鶏」に短期間で支配されてから、ジャワは独立するとも言われている³⁸。したがって、インドネシア人は日本軍を歓迎したことは当然のことであつた³⁹。宣伝班員としての北原はお

³³ 北原武夫「ジャカルタ入城日誌」(『雨期來る』文體社、1943)、p.65。

³⁴ 北原武夫、上掲書、p.65。

³⁵ 神谷忠孝「ジャワの徴用文学者—モフタル・ルビスの報告を軸に」(『昭和文学研究』第25集、1992)、p.144。

³⁶ 町田啓二、前掲書、p.212。

³⁷ Prof. Dr. Slamet Muljana, *Kesadaran Nasional : Dari Kolonialisme Sampai Kemerdekaan* Jilid 1 (Yogyakarta : LKiS, 2008), p.280。

³⁸ Pramoejya Ananta Toer (*Nyanyi Sunyi Seorang Bisu 2*, Jakarta : Hasta Mitra, 2000), p.100。

そらくジャヤバヤ予言のことを知っていたため、「我々を西洋の植民地主義から解放させて独立させる」という、日本人へのインドネシア人の期待も分かっていたと推測できる。

日本軍に対するインドネシア人の尊敬の仕方に関して、北原は、それは「根拠がない」・「頼りない」・「不要」⁴⁰であると思っている。また、エッセイ「インドネシア人の性格」において、日本人を尊敬するインドネシア人に対する不信感を以下のように述べている。

現在インドネシア人は、僕等日本人を崇敬し唯々諾々として、すべてのことに従つてゐるが、それを彼等が生来素朴で素直だからだと解したら、速断に失しはしないかと思ふ。いろいろの意味で原始的で程度が低いといふ點で、彼等がその心情の裡にまだ十分素朴であり得る可能性を保持してゐるとは言へよう。が、しかし 尠くとも僕が感じ得た限り、彼等は決して素直だとは言へぬ(p.148)。

以上の文章に反映されているインドネシア人に対する不信感の裏には、「書けなかった実情」という徴用作家の限界が存在すると考えられる。この「書けなかった実情」とは、日本はインドネシア人を西洋の植民地主義から解放させても、「独立」というインドネシア人の希望には応えられないということであつた。インドネシア人が「大東亜共栄圏」建設という日本の本当の目的が分かっていたら、その尊敬の態度は反日感情に変わってしまうということを、北原は十分に認識していたのであろう。実際、北原がインドネシアに滞在している間に、少なくとも二つの反日事件が起きている。一つ目は、イスラム学校における「最敬礼の禁止」である(詳細は注12を参照)。二つ目は、スマトラ島の北部アチェ州において、イスラムの指導者であつたTeungku Abdul Jalil^(トゥンク アブドゥル ジャリル)が「日本はイスラム教の敵だ」と述べ、1942年8月以降、指導したイスラム学校に日本批判の声を上げ続けたが、同年11月頭に日本軍に攻撃されて死亡したという事件である⁴¹。

前述の「言葉より実践」という「大東亜共栄圏」構想に対する北原の態度から判断すれば、「インドネシア人の陰的な惨酷さ」を取り上げることはむしろ、「大東亜共栄圏」の宣伝の方法になるのではないかと考えられる。北原にとって、植民地における実際問題を認識しなければ、相応しい政策が取れず、インドネシア人の協力も獲得できなくなるのである。北原の主張は、インドネシア人の協力を得なければ、「大東亜共栄圏」を建設することは不可能になる、ということなのである。実際は、「陰的な惨酷」の性格を持つ庶

39 回想録において、インドネシアの代表的な文学者のPramoedya Ananta Toer^(プラムディオ アンタ トー)は、出身地である東部ジャワのBlitar^(ブラタール)に辿り着いた日本軍が現地人に歓迎されるエピソードを語り、「人々は大声で『日本人は兄だ！日本人は兄だ！』と歓呼した。オランダの力に専念してきた人を除いて、みんなは心が美しい希望に満ちていると僕は思った」と記している (Pramoedya Ananta Toer, 上掲書, p.97)。

40 北原武夫「ジャカルタ入城日誌」(『雨期来る』文體社, 1943), p.66

41 Anthony Reid & Shiraishi Saya, "Rural Unrest in Sumatra, 1942: A Japanese Report", (*Indonesia*, Vol 21, 1976), p.123.

民の協力の獲得について、北原は以下のように提案している。

彼等が現在の豪味の境地から脱して眞の意味での素直さを獲得するためには、僕等日本人はいろいろの意味で彼等の程度を高め、勇氣とか正しさとかいふものについての心の在りどころを確平たる自覺にまで引き上げてやらなければならぬ。現在ジャワで、何かの意味で多少とも、皇軍に協力してゐると言ひ得る範圍のインドネシアの知識階級が實に寥々たる數であることを考へると、このことは僕等日本人にとつても且又インドネシア人自身にとつても、十分に考慮に價する問題ではないかと思ふ。また素朴の域にある彼等インドネシア人をして第二の支那人たらしめてはならぬ。僕は本氣でさう思つた。(pp.148-149)

以上の引用文から判断すれば、北原が述べようとしていることは、インドネシア人全体の協力が必要であるものの、実際に最も獲得し難いものが先住民層の協力である、ということだ。北原は、日本軍と協力している「寥々たる數」の知識人について触れているが、その協力のかたちに関しては述べていない。しかしそれは、日本軍が刊行した現地語新聞において知識人が「大東亜共栄圏」宣伝に関与していたことを示しているものであると推測できる。浅野晃の従軍記『ジャワ戡定餘話』において、インドネシア語新聞『アジア・ラヤ』に執筆者・編集者として勤めている詩人のSoetan Perang Boestami、文学者のPane Bersaudaraの名前が挙げられており、この点については確認できるだろう。日本統治初期における植民地政策は、まさに「文化工作」を重視するため、特に民族主義者であった知識人をあまり関与させておらず、その結果、「三亜運動」のような政策はインドネシア人に批判されていた。

「文化工作」は「實に隱密な、陰慘と言つてもいいほどの慘忍さを持つてゐる」という庶民に現実には触れられなかったため、インドネシア人全体の協力を獲得するには無効な行動である、というのが北原の示唆である。北原は、「いろいろの意味で彼等の程度を高め」、「勇氣・正しさ・心の在りどころを確平たる自覺にまで引き上げてやらなければならぬ」、「第二の支那人たらしめてはならぬ」という、実際問題の解決に必要な行動を提案している。換言すれば、北原は、インドネシア人全体の協力を得るために、インドネシア人を重視する政策を取ることを主張している。

5 終わりに

1942年9月頃、「三亜運動」はインドネシア人の支持を得られずに終わった。その代わり、翌年4月16日にPUTERA(民衆総力結集運動)という新しい組織が始まった。「三亜運動」の失敗から学んだように、日本軍政は「四人組」と呼ばれたスカルノ、ハッタ、キ・ハジャール・デワンタラとマス・マンシュルという民族主義運動者を先頭に立たせ、イン

ドネシア人の独立希望を受け入れるアピールをしていた。しかし、この組織の本当の目的は「三亜運動」と変わらなかった。PUTERAは「対日協力に向けた総力結集の名の下に民族的結束の強化と社会の組織化をめざし、食糧供出や労働動員に協力した」⁴²ものであった。

北原武夫は「三亜運動」が終わったところ、まだインドネシアに滞在していたと推測される。しかし、代わりとしてのPUTERAが始まったころにはすでに日本に帰国していた。エッセイ「インドネシア人の性格」の初出情報は未詳のため、書き下ろしとして従軍記『雨期来る』(1943.8)に収録されたとされる。また、実際に本作品はいつ書かれたか知られておらず、帰国してから執筆したものとされている。無論、PUTERAの確立は北原の考えによるものではなかった。しかし、インドネシア人全体の協力を獲得するために、インドネシア人の要求に応えるような政策を取るべきであるという、日本軍政がすべき行動に関する考えは、本作品に反映されていると言える。

「同一性」・「肯定化」といった典型的な南方表現とは異なり、北原は日本統治初期のインドネシアにおける実際問題に目を向け、「實に隠密な惨忍さ」・「一種名状し難い残忍さ」というインドネシア人の「本当の性格」を発見した。北原の指摘では、この「本当の性格」は相応しい政策によって解決されなければ、「大東亜共栄圏」建設を妨げるという、植民地の醜いリアリティーとして示されている。このような指摘は、「大東亜共栄圏」建設をめざすことに集約されるため、北原の差別表現は、独特なプロパガンダの手法と言えるのではないだろうか。結局、南方諸民族の親密的な描写と差別的な描写は表裏一体のものであろう。

参考文献(Bibliography)

- 浅野晃(1996)「ジャワ戯定餘話」『南方徴用作家叢書 ジャワ編 1 浅野晃』, 東京: 龍溪書舎, Asano, Akira(1996) *Jawa Kantei Yowa. Nanpou Cyoyou Sakka Sousyo Jawahen 1 Asano Akira*. Tokyo: Ryuukeisyosya.
- 河西晃祐(2001)「日本の南方起源「言説」と南進論」『上智史学』第46号, pp.127-165. Kawanishi, Kousuke(2001) *Nihon no Nanpou Kigen 'Gensetsu' to Nanshinron, Jouchi Shigaku*, Vol. 46, pp.127-165.
- 河西晃祐(2002)「徴用作家北原武夫・浅野晃・武田麟太郎の「インドネシア」: 戦時期「南方」観の一考察」『紀尾井史学』第21号, p.17-39. Kawanishi, Kousuke(2002) *Cyoyou Sakka Kitahara Takeo, Asano Akira, Takeda Rintaro no 'Indonesia': Senjiki 'Nanpou' Kan no Ichikousatsu*, Kioi Shigaku, Vol. 21, pp.17-39.
- 神谷忠孝(1992)「ジャワの徴用文学者—モフタル・ルビスの報告を軸に」『昭和文学研究』第25集, pp.142-148. Kamiya, Tadataka(1992) *Jawa no Cyoyou Bungakusya—Mofutaru Rubisu no Hukoku wo Jiku ni, Syouwa Bungaku Kenkyuu*, Vol. 25, pp.142-148.
- 北原武夫(1943)『雨期来る』, 東京: 文體社, Kitahara, Takeo(1943) *Uki Kuru*. Tokyo: Buntaisya.
- 北原武夫(1996)『南方徴用作家叢書 ジャワ編 12 北原武夫』, 東京: 龍溪書舎, Kitahara, Takeo(1996) *Nanpou*

42 中野聡『東南アジア占領と日本人—帝国・日本の解体』(岩波書店, 2012), p.295.

- Cyouyou Sakka Sousyo Jawahen 12 Kitahara Takeo*. Tokyo : Ryuukeisyosya.
- 木村一信(1998)「北原武夫の「ジャワ徴用」体験—薔薇を描くこと—」『論究日本文学』第68巻, pp.45-52. Kimura, Kazuki(1998) Kitahara Takeo no 'Jawa Taiken' —Bara wo Egaku Koto—, *Ronkyuu Nihon Bungaku*, Vol. 68, pp.45-52.
- 寒川光太郎(1943)『従軍風土記』, 東京 : 與垂日本社. Samukawa, Koutarou(1943) *Jyuugun Fuudoki*. Tokyo : Yoanishonsha.
- 高見順(1943)『蘭印の印象』『高見順集』, 東京 : 河出書房, pp.313-353. Takami, Jun(1943) *Ranin no Insyuu Takami Jun Syuu*. Tokyo : Kawade Syobou, pp.313-353.
- 武田麟太郎(1996)「ジャワ更紗」『南方徴用作家叢書 ジャワ篇 13 斎藤良輔・武田麟太郎』, 東京 : 竜溪書舎. Takeda, Rintarou(1996) *Jawa Sarasa, Nanpou Cyouyou Sakka Sousyo Jawahen 13 Saitou Ryousuke, Takeda Rintarou*. Tokyo : Ryuukeisyosya.
- 土屋忍(2013)『南洋文学の生成 : 訪れることと想うこと』, 東京 : 新典社. Tsuchiya, Shinobu(2013) *Nanyou Bungaku no 1940endai—Kitahara Takeo wo chyuushin ni—, Nanyou Bungaku no Seisei : Otozureru koto to Omou Koto*. Tokyo : Shintensha.
- 中野聡(2012)『東南アジア占領と日本人—帝国・日本の解体』, 東京 : 岩波書店. Nakano, Satoshi(2012) *Tounan Aja Senryou to Nihonjin—Teikoku Nihon no Kaitai*. Tokyo : Iwanami Syoten.
- 町田啓二(1978)『ある軍人の紙碑—剣とペン—』, 東京 : 芙蓉書房. Machida, Keiji(1978) *Aru Gunjin no Shihi—Ken to Pen—*. Tokyo : Fuyousyobou.
- Pratt, Mary Louise(2008). *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*. 2nd ed. New York : Routledge.
- Reid, Anthony & Shiraishi, Saya(1976). "Rural Unrest in Sumatra, 1942 : A Japanese Report". *Indonesia* 21 (4), pp.115-133.
- Touwen-Bouwsmas, Elly(1996). "The Indonesian Nationalists and the Japanese "Liberation" of Indonesia : Visions and Reactions". *Journal of Southeast Asian Studies* 27(3), pp.1-18.
- Vickers, Adrian(2005). *A History of Modern Indonesia*. New York : Cambridge University Press.
- Yule, Henry & Burnell, Arthur Coke(1903). *Hobson-Jobson : A Glossary of Anglo-Indian Colloquial Words and Phrases, and of Kindred Terms : Etymological, Historical, Geographical, and Discursive*. William Crooke.ed. London : John Murray.
- "Insanity Among Asiatics". *Eastern Daily Mail and Straits Morning Advertisers*. 23 Oct. 1905.
- "Jottings From a Tropical Island". *The Straits Times*. 30 May. 1874.
- Muljana,「Prof.」Dr. Slamet(2008)「*Kesadaran Nasional : Dari Kolonialisme Sampai Kemerdekaan*」1. Yogyakarta : LKIS.
- Toer, Pramoedya Ananta(2000). *Myanyi Sunyi Seorang Bisu 2*. Jakarta : Hasta Mitra.